対談「企画からみた教化」

対談者　（読売エージェンシー・シニアディレクター）石川哲也
（日蓮宗現代宗教研究所所長）田澤元泰
司会　（日蓮宗現代宗教研究所主任）伊藤立教

司会　山本一力さんの講演を受けて、後の分科会に繋げるための対談を行います。企画の専門家石川哲也氏と現宗研所長田澤元泰師の対談を参考に、分科会に繋げていただきます。よろしくお願いします。前提として『あかね空』を読んでもらったと思うのですが、その辺のお話からお願い致します。

田澤師　今日、山本先生のご講演、具体的に、『あかね空』そのものについてのお話はなかったんですが、やはり作品を作られる手前のプロセスと申しましょうか、背景、そういうものが講演の中にずいぶん出てきたような気がします。『あかね空』を皆さんもご覧いただいた前提でございますので、ちょっと一つ感じたのは、あの中で、京豆腐を江戸で広める、そんなきっかけになったのが、永代寺の住職ではないようですがまあ執事といいましょうか、そこそこの権限を持った西周、あの方の判断、あの方の理解が結果として、京豆腐が永代寺で使われたというステータスによって、地域にもそれなりの存在が認められた、いいきっかけになったということなんですが、現実的には、じゃあうちの寺でそれはあり得るのかなあと考えまして、まあ時代という違いもあるにしてもやはり、今の日蓮宗で言うならば、せめて本山クラス、そのへんがそういう可能性を持ってんじゃないのかなと思います。たまたま茂原でいえば、藻原寺という、本山がございますけど、地元密着型の、そういう中で、そのステータスを保っているならば、藻

原寺の貫主様の仰ったことが、茂原の人々にどんなような感じでこう受けられるかなあという、可能性はあるのかなって感じはします。一個人で今現実に、皆さん方地域で活躍をされているにしても、ああした小説のような形でどこまでできるのかなというのはちょっと私共は、不安な感じがするんですけども、石川さんのほうとしてはその辺はどうお考えですかね。

石川氏　田澤上人はお坊さんなので、感じ方としては非常にお坊さんに焦点が合ったところで着目されたと思うんですけども、私のほうはどちらかというと通常、商品とかサービスを普及させていく仕事をしてる人間なものですから、宝暦十二年とか十三年というのはどういう時代だったのかと思ってみたり、小林一茶が生まれたとか、本居宣長が生まれたとか、寛政の改革があったとか時代背景を見ながら考えたりしました。登場する主人公の永吉さんという方ですが、京の豆腐職人として修行してきて、学んだ京風ブランドマーケティングを東京の深川にやって来て、自分の店を出して試したんです。店を出すにあたってどうしたかというと、小説前半の非常に面白いところなんですけど、隣近所で売ってるお豆腐を買い集めて、自分でじかに味を試してみるとか、形、大きさを感じてみるとか、そういうことから始めてるんですよね。ですから、まず地元、自分が住む周辺というものを洗い直してみて、そこで食べてるお豆腐はどういうものなんだろうかって調べる。宝暦十二年に我々が今やってるような仕事の取り組み方を既にやってるんですね。店を出すにあたっての出店事前調査ですね。それから原材料である豆を仕入れに行くわけですけども、豆は、他店で通常使われてる豆じゃなくて、ちょっとレベルの高い豆、値段は高いんだけど自分の味を守りたいと言って、非常に品質の高い豆を調達する。そしてお豆腐のサイズを小さくして売る。サイズを変え、価格を変え、それから京で自分が使ってきた原材料である豆の調達などこだわりも見せますね。それから、井戸の一件がありましたよね、長屋の井戸が、それも非常に水が美味しい井戸水の出る長屋がいいということも必見ですね。作者の山本一力さんも広告関係の仕事をやってたという風に仰ってましたから、そうしたのかどうか分からないんですけど、

永吉さんという人の、何というかマーケティング能力というんですか、地域を調べて、自分がどうやったら生きていけるのかということを明確に実行していましたね。今で言うと、本物志向とか、或いは地域密着戦略とか、或いは新商品の開発導入などあらゆる意味での差別化戦略を採ってきましたよね。話の途中で、普通のお豆腐だけじゃなくて丸い豆腐を考えたり、いろいろな具材を入れて新しく料理屋さんに持ち込んだり今流ですよね。それから豆乳ですか、お金のない、乳の出ないご近所の奥様方に、豆乳の段階で飲んでいただいて、いわゆる乳牛から乳を搾り出すモノより安いっていうんで、新しい市場を開発したりして、あの時代にすごいな、と思います。お豆腐一本で生きていくんじゃなくて、さまざまなバリエーションの商品開発をしながら、新しい業態に入り込んで行く。その努力と心のこもった誠意がお寺さんに評価され、価値を認められたんじゃないですか。永吉さんのとった行動は、非常に現代的というか今的に言うと「選択と集中」っていうんですか、自分のビジネスに集中し、特化して生きる知恵を身に付けていたと思います。長屋の隣近所に住む若いお嬢さんが、彼を気に入って、ＰＲからクチコミ、商品の開発、営業開発まで全部手伝ってますね。ですから、お坊さんの世界で言えば、寺庭婦人がお上人に変わって、自坊周辺へお寺のＰＲから、新しい顧客作りから人間関係作りまでサポートしてる、そういう姿があの時代の中で、とてもクリアに書かれてるんですね。小説の後半は家族問題がかなり浮き彫りになっていますが、永吉さんが京で培った暖簾をどうやって江戸で普及してくかというブランド導入戦略がかなり興味深かったですね。家族問題も大切ですが、京風の豆腐ビジネスが江戸でどう評価され、成功していくかというプロセスが面白かったんです。別の意味で、最終的には京の誇りと京職人の技が江戸に通じたんではないかという風に思います。成功した影には地域のお寺さんの果たした役割が大きいと思いますね。注文してあげるとか食べてあげるだけではなくて、存在価値を認めてあげることによって、地域住民の人達に影響を及ぼす、地域のトータルコーディネータとしてのお寺のありようが垣間見られ、全てが表現されてはいませんけど、裏では随分そういうサポートをしてたんだな、と想像できる作品だと思います。あの本

は、教化とか布教活動等に非常に役に立つことが書かれていますね。

田澤師　先ほど、西周の話を出しましたけども、私が何故本山にこだわったかと言いますとね、やっぱりその、地域の本山がステータスを持っててくれれば、当然その末寺である私みたいな一般の寺の者もその影響を受ける。逆に、それが落ちてしまえば、いくら我々が努力しても落ちてしまう、もっと大きく言えば、地域においての、それは例えば本山であると同時に、もっと全体的に言えば宗門そのものの看板というのが、どこまで社会的なステータスを持っててくれるかによって、我々もかなり影響されてるんじゃないかな。豆腐で言うならば、京都のステータスっていうものが当時江戸へ、こう影響を持ってきたみたいなもんと同じように、日蓮宗っていうものの大きなステータスがどこまであるのかな、っていう所は常に、問題の課題だろうと思うんです。

石川氏　相当、跳ね返されても跳ね返されても、南禅寺の暖簾を、学んだことを捨ててまで、江戸に同化しないと生きていけないんじゃないかとアドバイス受けたにもかかわらず、教えをきちっと守って、実践した成功例なんですよね。そういう点が非常に面白かったんじゃないかと思います。先ほど山本一力先生のお話の中に、人は自分一人だけで生きていけない、お坊さんはやっぱり人を導く生き方をしなきゃいけないって仰ってましたけど、今回の教研会議の共生というテーマも、そういう意味では非常に重要なテーマだなあと思います。昨日、朝日新聞の朝刊に「テロと世界」という特集がありまして、そこに文明の衝突というテーマで異教徒との共生問題についてのことが書かれてました。共生の仕方にもイギリス型とフランス型があると、フランス国民に対して、イスラム教徒を受け入れる上で、貴方は教徒ですか、国民ですか、ということを、アンケートしたら、フランス型は半々の回答だったと、加えて、私はフランスの国民であると強くアンケートで答えた人はかなりいたそうです。イギリスも同じように調査したら、イギリス国民はどちらかというと、私はイスラム教徒である、というような回答が多かったという結果が記事に出てました。自分は国民と言うべきなのか教徒とすべきなのか、その共生という問題が世界的に、今、テーマとして

重要な問題を抱えてるなというのが実感です。昨日の朝日新聞で、なるほど、そういうことが世の中で起きていて、未解決のままその現実を抱えながらさまざまな所でテロが起きたりいろいろな騒ぎが起きたりしているんだなと、この共生という問題は非常に重要なテーマなんじゃないかなと認識しました。

田澤師　日蓮宗では従来、布教の展開の中では折伏論がありまして、共生という言葉に対するある意味でのアレルギーがあるのかも知れませんけど、これはやっぱりいわゆる教化する側の、基本的な姿勢の問題だろうという風に私は感じておるんですね。それで、現宗研でも、いわゆる、相手の目線、世間の目線という、どうしても今まで我々は、これを教えなければ、これが分かんなければ、教化でもなければ、相手は信徒でもないというような、こう一方的ななんかこう、やり方っていうものが多かった気がするんですけど、この教研会議なんかでもそうですけども、世間の目線、或いは相手の目線とか、そういうものをどう取り入れようか、そういう問題意識を一つ出すことによって、今までのそういうものから、違った姿勢のもので捉えていこう、そこではやっぱりこの共生という、言葉は色々含みがあると思うんです。我々の中にもどこまでその共生の要素というものを持ち込めるか、またそれが可能なのかということを一度はしっかりやっとかないと、いわゆる、社会の中で、孤立してしまう危険というものをやっぱり我々自身がそろそろ感じてきているのではないかなと思います。分科会の中でも是非この辺はね、詰めていただきたいなと思っている所です。

司会　アンケートについてお願いします。

石川氏　はい、今日ご出席の皆様に、私のわがままで、Ａ４サイズの「教研会議の会議資料」をお配りさせていただきました。、私はお坊さんの世界とは全く無縁の人間で、一般のいわゆる生活者ですので、だからこそ、議論があるんだという風に思って出てきました。配布資料についてですが、アンケートの採り方も内容的にも、時間がなく不充分でしたが、簡単に、皆さんに伺いたかったもんですから、ちょっと、聞かせていただきました。百二十九通出し

て八十一通返信という形で、六二・八％の人にお答えをいただきました。設問は、五つなんですけども、その最初の質問がですね、一番、私が今回、田澤上人とお話するにあたって、田澤上人に聞きたかった質問なんです。いままで、上人と付き合いがなかったわけでもなく、結構知ってる方なんですが、こういういい機会に聞いてみよう、ということで質問させていただきました。「お坊さんという職業は好きですか？」って聞かせていただきました。これは出席の皆さんにも答えていただきました。好きだという人が五十九人で、どちらとも言えないって人が十八人、好きじゃないって人は三人の方だったんです。で、この質問をしましたら「お坊さんっていうのは、職業じゃないんじゃないか」とか、「或いは好きとか嫌いとかで答えるもんじゃない」とかっていう、ご返事があった方が何人かいらっしゃって、ああ、そういうことなのかと、初めて、私もお坊さんって職業じゃないのかと、素朴に思いました。住職は職業で、僧侶は職業ではないっていう認識が、僕の中にあったもんですから、たまたま、投げてみよう、ということで投げた回答だったんですね。また、出てきた結果の中でとても気になったのは、お坊さんという職業が好き、嫌いどちらとも言えない、って回答されたことです。何故気になったかというと、私も広告の仕事をしてて、広告が好きじゃないって人は辞めたほうがいい、と思っている人間なんです、広告のことが好きになれないとか、とてもつきあえないとか、いやだとかいう人と一緒に仕事するのは嫌いなので、必ず仕事をするときスタッフに広告のこと好きですか、って聞くんです。広告は二十四時間、四六時中考えてても飽きないって面白さがあるといつも思ってるもんですから。とりあえず、仕事ごとにパートナーの人には聞くんです。ですから、そういう意味で、どちらとも言えない18通というのが、どうも気になりまして、それで田澤上人にちょっと聞いてみたいなと思って質問です。どうなんですか。

田澤師　私も実は、いわゆる在家出家なんですが、職業選んだって意識全くないんです。最近の相談の中には、定年後の、いわゆる第二の就職みたいな相談を受けることがあります、まあ、これは例外です。私の経験で言えば、今

日、恐らく在家の方も、出家の方もいると思うんですけど、出家しようって時に、職業を選ぶというまず意識はまずないと思うんです。世間の目では、よく何かの時に申込書を書く時に、職種とか書く時にどこへ丸をつけようかなあって、私はっきり言って自由業の所にしてるんですけども、そういう意味では世間ではお坊さんという一つの職種として見てるんだろうなってことですね。大学の同級生の殆どが寺の倅で、殆どが嫌々来てました。四年の間に段々本人も悩んだ上で、やっぱり信行道場入ったとか、いろんな理由があって、やっぱり俺は坊主やるわって、卒業の時は殆どがみんなお寺を継ぐという意識を持つんです。寺の倅さんというのは、後から良さを見つけるような、後付けからその位置を見てく、という感じだと思うんです。ですから、世間で言う、この就職をしたいな、或いはこの世界に飛び込んで、自分も生きてみたいな、という部分でない人っていうのは、後から何かこう、良さを、もっと言えば親父の背中見ながら生きてくみたいな所から、いわゆる好きとか嫌いじゃない、もうやらなきゃいけないんだみたいな、こう、追い込まれていく中から掴んでく、という人が多いですね、それがこの十八の数じゃないかなと、まあ、今日皆さんの中にもこの回答者がいらっしゃれば、分科会の中でもし、そうでもないんだ、というご意見あれば何かの機会に発言していただきたいと思います。石川さんが質問、疑問に思われる、その間の幅っていうのは意外に我々の中にあるんじゃないかなと、それから在家の中でもね、お坊さんなってみたけどどうも違うんじゃねえかって、逆に悩む部分もある。好きなはずが何か嫌いになっちゃうみたい、でも、信仰上絶対これは譲れない、あの、はずせないとかっていう所で逆の葛藤してる、そういう人も或いはこの十八の中にはいるのかな、と、そんな感じがします。

石川氏　まあ、僕自身がお坊さんであれば、「職業として好きではない」ときっと、人を導いたり、説得するというとおかしいんですけど、できないだろうなっていう風に思ってるもんですから、そういうことです。

田澤師　まあ、一生懸命好きになろうとしている、そういう世界もあるんで。

石川氏　分かりました。

田澤師　部分もあると思うんですねえ。

石川氏　それでは二番目の質問に入ります。「他の職業を経験したことがありますか」ということなんですが。何故そういう質問したかと言いますと、最近学校の先生などを見ていても私より年代が若い先生方が多くて、この先生の人生経験というか、お話をしてても、私を納得させるようなものが醸し出せるような方、先生方が少なくなってきたな、という印象を受けています。ずっと同じ職業してきたからいいかどうかって、個人差はあると思います。私の個人的な意見としては、生まれてこのかた一つの職業をやっていることよりは多少、違う職業経験しながら、山本一力先生じゃないですけど、作家になる前に、いろんな職業積んでた方が、何かこう、そういう境地に至るまでの何か、別の体験と言いますかね、そういったものがあるほうが非常に滋養の富んだお話なり説得力があるのではないか、或いはその人徳とか魅力に繋がってく要素があるのではないかという風に思ったんです。私の印象としては、別の職業に就いたことがあるいう人が四十七人いることは以外でした。もっと、他の職業経験なしでお寺を継いで、そのままピュアに、お坊さんになられてる方が多いのかな、って印象があったもんですから、意外と他の職業経験してらっしゃるんだな、ってのが個人的な思いなんですけど。

田澤師　このグラフ見てちょっと感じてるのは、七十歳以上の方という、これは一〇〇％経験してるんですね。まあ、ご覧の通りで、七十未満はだんだん減って、三十歳未満となると二十九％、これどういうのかなあ、長い経験の間にはそういう経験をしたことがあるんだろうというのと、私はむしろその、今六十から上の人っていうのは、まあ在家出家ということもあるとは思いますけども、何かやっぱりその、若い時にそういう社会的な経験をしたうえで坊さんになってきてる、寺の倅でも一回嫌だって出てって、それでもって、社会の厳しさ感じながらまた親父の背中見ながら、またやっぱり寺継ぐかっていう、そういうことも含まれています。この三十未満の方、今の若い人がこれから先、五十、六十の間に、社会的な部分で違う職業に就く可能性あるんだろうか、私はない気がするん

です。やっぱり若い時の経験、いつ頃ですかっての取ってませんから分かりませんけども、年代的にもまあ戦争とかいろんなこと含めて、食っていけない、少なくともあの、よくうちの先輩もそうでしたけど、学校の先生しながらとか、役所勤めながらっていうお坊さんがたくさんいました。今は殆ど社会的な制裁があったりしてできなくなってます。そういう意味では、やっぱり年代的な違いはその、社会的な順序でいって、今はもうできないよ、というような数字だろうと思うんです、そうしますと、今石川さんが敢えて仰ったように、そういうもののこう経験のない人がどんどん増えてく集団の中で、対社会的なものを求めていこうという部分の、私はある意味では不安を感じるんですね。

石川氏　うん。これはお坊さんの質の問題もそうなんですけど、量的にお坊さんになる人をフォローできるんですか。例えば、今少子化の時代で、天皇家の跡継ぎが、男子が生まれたら、云々とか、女子だったらどうなんだとか、議論があって、同様に、お坊さんになる人の人数がですね、減ってしまうと、非常に困った事態になると思うもんですから。多少そういう要素も含めて、お坊さん個人の資質の問題とお坊さんになる、なりかたというか、跡の継ぎ方が今のままでいいのか含めて分かりませんけども、今後は多少門戸を開いていかないと、きついのかな、という感じもするんです。そんなことでちょっと聞いてみたんです。

田澤師　ああ、そうですか。

石川氏　それでは、三番目の質問に入ります。「一般社会に影響を与える活動をしてますか」これがですね、皆さんのアンケートの回答の中に社会に影響を与えてる活動してるか、っていう箇所がピンとこなかったという人が何人かありました。ただ普通にですね、ほんとに、お寺さんの周辺は即実社会ですので、いろいろな意味で影響を与えるようなアクションを起こしてらっしゃるかどうか、例えば、大きく言えばチベットに眼鏡を送ってらっしゃる活動をしてらっしゃる方もいれば、他にも小さいながら活動してらっしゃる方がいると思うんで、それは田澤上人はどうな

んですか。ここでは、してる、してないがだいたい半分ぐらいずつですね。

田澤師　あの、これ恐らく質問の意図が読みとれないというか、掴みきれなかったと思うんですけども、ちょっと気になってるのがですね、住職の方が二十人、まあパーセンテージで四十八％してないと答えてる、で、その前にこの、一般社会に影響を与えるという、その意味合いですね、私としては当然、寺の存在、或いは寺院教会結社を中心としてその布教活動しているという部分はもう影響与えてるという意識を持っていいんじゃないかと思っています。もしそういう意識がない、例えば非住職、寺の活動には全面入ってませんよという方々の場合は、これは影響与えてないという答えは分かるにしても、住職という方々の意味合いが、恐らくこれは、今、仰った何か特別な社会的活動をしてるかどうかという質問をもしされたならば、恐らく寺としての部分での、活動は少ないだろうと、いう意味ではこの数字は分かるんです。ただ、もしそうでないとなると、寺の存在ってどう見てるんだろう、だからこの質問に対して、いや特別な眼鏡を送ってますとか、或いは、そうしたその、ボランティア活動の、一つの団体をですね、我々の中で檀信徒含めながら支持してますとかというような活動でないと、何もしてないから、社会に影響を与えている活動してない、という風になっちゃう、それっていいんだろうかな。あの、無理矢理活動するって意味じゃないんです。寺で、例えばお会式一つにしても、或いはお彼岸の行事一つにしても、寺が何かしらそのメッセージを発しながら、或いは皆さんお参りしましょうとか、或いはお会式っていうのは、皆さん来て、お参りしましょうとかいう、働きかけというものを、社会的に影響を与えない、と見てたら、こっちのほうが問題じゃないかなと思います。もしあの、回答の中でですね、寺が何も社会的なボランティア、或いは社会活動、社会教化活動ですか、それに関わってないから、影響与えてない、という風にもし意識されたら僕はこの、設問の云々じゃなくて、それの捉え方のほうが危険じゃないかなという風に、思ってはいるんです。寺の存在性ってものが、社会と既に浮いている、或いは潜ってるという風にもう、自ら認めてるような所、それが何か前提にあるっていうのはもしそうだったら嫌だな、と

は思うんですけどね。

石川氏　私も一般の企業に勤めていますが、最近はボランティア活動をしているかどうかっていうことも、社員の評価の一部になってきています。先ほどの山本一力先生のお話の中にもプルデンシャル生命保険会社の例がありましたが、やはりその、企業なり、その企業に勤める人達の評価っていうんですかね、そういうものの中に社会貢献という要素が含まれてきています。お坊さん個人の評価、お寺の評価ってのは、どういう評価基準で査定されているのか、檀家さんの満足度は如何なものかなど、外に向かって影響を与えているか与えないかっていうアクションも、相当大きな要素じゃないかなと思います。

田澤師　あの、石川さんの目でご覧になって、お寺が、いわゆる、例えば眼鏡を送りましょうと、まあよくあの、伝道部から、海外のあの、救援基金の箱とかって、よくね、玄関先に置いてる、例えばどこかで大きな地震があった、災害援助しましょうとかっていう、まあ、時々やることありますけども、そういうこと以外でね、そこに寺が存在している、或いは寺で何か行事をしてるってのは、やっぱり社会的な影響とは見ないものなんですか。

石川氏　我々の世代ぐらいまでは、先ほどの山本さんも一九四八年生まれですが、の方達ってのは、結構、そういう意味での影響を受けてきた人間だと思うんです。これからの若い人達っていうか、今の若い人達をターゲットにして、ある程度関係を持っていこうとするとすれば、関係の作り方、共感性を持つのが難しいような気がします。実際的な理解っていうんですかね、影響を与えてるか、与えてないかって把握するのは非常に難しいんじゃないかなと。

田澤師　そういう意味ではボランティアも一つの例です。例ですけどボランティアってものを前面にやっているということを見せる、そういう要素がやっぱりこれからある程度その影響を考える必要があります。先ほどの、山本一力さんの講演の中で、お坊さんの存在が仏教だよと、本尊の前に、敢えて拝まなくても、そこのお坊さんがいるだけで仏教なんだよという、そのお話が、大変印象的だったんです。やっぱり、我々が何かこう、どこかで仕切りを作っ

ちゃって、お寺に上がって拝んだら、一つの法会だけど、町中で歩いてる坊さんとは違うという、何かどっかで二面性を切り離しながら生きてくみたいな所が時々、あるかも知れない。違うんだなあ、寝ても起きても、やっぱり法華の坊主なんだよな、ということを何か言われたような気がするんですね。

石川氏　結局ですね、それは法華経の坊さんは坊さんで構わないんですが、やはり実際に発言したり、アクションを起こしていかないと、関係性が繋がらないと思うんですよね。ですから、黙っていると非常に古臭いものになってしまって、何と言うんですか、関係がなかなか保てない宗教になっていってしまうのではないか。

田澤師　関係を保つ。

石川氏　ええ。ですから、言葉で言ってる時はいいんですけど、それはそれで構わないんですけど、やはり関係を結ばないと、やっぱり一つの形は取れないんじゃないですか。それはまあ、一つの影響という形では出てこないと思うんです。

田澤師　いわゆるアクションという、まあ発言、言葉含めて、アクション起こすということが関係を繋ぐ、そんな関係があって初めてそれが影響という形になっていくという。

石川氏　そうですね。

田澤師　ことですね。こちらの一方的な思い込みじゃ、何にもそりゃあ、意味がないというね。

石川氏　昔のコマーシャルであれなんですけど、男は黙ってサッポロビール、って広告ありましたけど、

田澤師　ありましたね、ええ。

石川氏　黙ってれば何かこう、感じてくれてにじみ出るような雰囲気をかもし出して、あのお坊さんは素敵とか言ってくれればいいんですけど、そういう時代じゃないと思うんですよ。やっぱり、語っていかないと、前へ出て行かないと理解してもらえない、という部分がありますから。

田澤師　まあ、理解をしてもらう、関係を持つという意味では私、二通りあると思うんですね。

石川氏　はい。

田澤師　こちらから、町中へ出てく、というような、まあ、仏陀を背負って街頭へってありましたけれども、そのような思いと、逆に寺をがばーっと戸を外して、もう、障子も何もとっぱらって、いつでもいらっしゃい、っていう、まあよく開放っていうんでしょうかね、まあこの二面あるかと思うんですよ。それはもう、お寺の歴史なりまたその住職の布教の展開の、できるできないがあろうかと思うんですけれども、やっぱりどこかその辺を我々自身も、取捨選択していかなきゃいけないのかなあ、という所なんでしょうね。

石川氏　ええ。

田澤師　ちょっと気になったもんでね、存在というものの、住職が、或いは皆さん方教師という意識で、自分の存在っていうものが影響を持ってないと思い込む怖さだけは、いつも意識して欲しいなと思います。

石川氏　質問の四になりますけども、これも結構、皆様から問い合わせがあったものなんですけど、「一般社会の中で人材を育ててますか」という質問に対して、育ててるって回答した人が二十六人で、育ててないという人が五十一人、ということだったんですね。この一般社会の中で人を育ててるかっていう質問にピンとこなかった部分もあるかも知れませんね

田澤師　一般社会の中で、と限定されますと、お寺ではないという意味ですよね。お寺を離れて、或いはお寺を出てその、活動してるか、っていうのが大前提になる。

石川氏　そうです。

田澤師　先ほどの話をひっくり返すようではありますけど、やっぱり坊さんとして外出しても、お寺を離れて何か具体的に人材育成に関わるか、というのはかなり限られて、自分が今やってるのは一つには、地元の、自分とこの檀

徒や或いは信徒に対する部分、これが殆ど九割です、プラスアルファで、子供会とか、地域ですね、或いはあの、それに附随する関係で、時々顔を出すかな、みたいなものでも、それが、恒常的じゃないですから、常に定期的にやってるもんじゃありませんので、突発的に、例えば今回ここ来て話してよとか、老人ホームへ毎月一回は行くけども、育成までにはなっていません。逆にこの、しているとお答えをしていただいてる方に、具体的な内容を是非聞きたいなと、僕はもっと少ないんじゃないかなと思っていたんですけどね。逆にこの数は多いのかな、って思いますけどね。

石川氏　やはり、今後の発展を考えて人を育てるっていうことは、教団の中でも非常に大事だし、関わり合いの中でお互いに影響を与えたり、受けたりということは非常に重要なことだと思うんですよね。ですからできる限り、外へ出ていただいて、一般社会と関わり合いを持つということをお坊さんに期待したいとこなんですけども。田澤さんの今考えてる、関わり方の一部をちょっとご紹介いただければと思うんですけども。

田澤師　茂原から東京に通ってる存在ですと何にもできませんが、私なりに坊主になって夢があります。今の状態は決してそれは夢は満足しているかっていったらまだまだ、夢の途中にもならない部分であります。といって、年齢もだんだん重ねてきてますので、先々そういつまでもね、元気でもいられるとは思いませんし、そろそろやはり、そういう段階へ、僧侶としての自分の人生の、最終の、まとめの段階へね、意識していこうかと、世間でいえば、もう私五十八ですから、六十という、定年間際になる年でもあります。私の場合はあんまり社会的活動してませんので、未信徒という言葉はやっぱり、例外になってはしまいますけども、これから関わってくいろんな人の中で、少しでも仏教に触れ、或いは宗祖の教えに触れていただく中で、それぞれが、同じ団塊の人間を中心としながら、やっぱり人間の最後のまとめをちゃんとして生きていける、なんていう風な形に、せめて助けることができればなと、これ自分の課題でもあるんですけども、そういう部分で、いろんな垣根をとりながらも、また自分が時には出てって、いろん

な人間の関係っていうんですかね、それを持ちながら、これからの部分を色々やっぱりやってみたいな、ということはございます。（笑）。

石川氏　それでは質問五に移ります。「近隣の人達との関わり合いを作ってますか」ということなんですけど、六十五人の人が作っていて、作ってない人が十五人いらっしゃる。地元周辺の人達と関わり合いを持たない人というのが十五人いるっていうのが、ちょっと驚いたわけです。やはりお寺さんは当たり前のことですが、周辺の人達と関わって生きてる、存在してるという風に理解していましたので、あんまり作ってない、っていうことがどういうことなのかな、という疑問がとてもあったんですけど、いかがですか。

田澤師　これは私も同感で、質問への誤解が何かあるのかな、とは思うんですが、文字面通り読めば、近隣ですから、まあ、お寺なり教会、或いは結社をお持ちの方が、その近隣との関わりを、全く没交渉で存在してるということに、私は全く分からないですね。関わりを作ってるかということと、回覧板回しっこしてます程度のつきあいなのか、これ意味が違うと思う。関わりというのが影響を持つ、お互いが何らかの意味で布教上、影響を持ち合っているという関わり、という意味であるならば、まあちょっとそこまでは、うちの寺はもう、殆ど周辺、人もいないし、まあ、そういう状態ではないという、敢えて想像すればそういう所かな。住職としても、六人いるわけですから、特殊なそういう今の過疎の問題を含めた中での住職として頑張ってるというような部分で、関わりを持ちたくても持てないという部分なのかなあと、以外読みようがないという所ですね。

石川氏　前から思ってたんですけど、ご住職の方達は、意外といい車に乗っているなあと、いつも思っています。クラウンだったり、外車はないかもしれませんが、日本では高級車に乗ってるなという印象が強いですね。あるお寺のお坊さんに私は、車に乗って出かけないで町中を歩きながら行ったほうがいいんじゃないか、歩いて目的地に行ったほうがいいんじゃないかと助言しています。近所の方々から声がかかったり挨拶したりという関係が取れずに「よ

くコミュニケーションて成立しますね」と嫌味を言ってたりしています。たまに、最近近所のお坊さんは何使って生活してんのかなと思って見ると、やっぱり車に乗って、すーっとその町を通り抜けてしまうという状況のようで、お忙しい方は仕方がないのかも知れませんが、やっぱり先ほどの『あかね空』の話じゃないですけどやっぱり、地元の人達との関係っていうんですかね、選挙の時もそうですけど、握手して、お願いしますお願いしますってやっていきますよね、ああいう時は車で通り過ぎないですよね、政治家の皆さんも。やはりきっちり、それぞれの顔の見える関係を作っていく必要があるんじゃないかと思います。この、宗務院前の、早水上人の前のお寺の掲示板を今日見ましたら、早水上人がいろんな所を取材して歩いて、いい町ってどんな町かと言えば、「コミュニティがきっちりできてる町」だという風に書いてありましたけども、やっぱり、そういうことが言える、ってことはやっぱり、きちっと町を歩いて見ているんだなっていう風に思いますね。ですから、その辺、私も田澤上人のお寺に伺う時は必ず茂原の駅から歩いて二十五分くらい歩いて行くんですけども、この辺のことについていかがですか。

田澤師　私、宗務院行くのに、うちから駅まで車で行ってまして、それは時間なくてそれこそ改札に飛び込むような形で電車乗って行くんですけども、石川さんから逆に町の変わった情報をもらうぐらいなんですよね。自分がその町の寺の住職していながら、ついこないだお盆のお経参りまでしてるんですよ、それでいて、町変わったねって言われて、ええっ？て言って、まあ実は言われたあと、こっそり、その前を通ってみたら、こんな店ができたか、或いはこんな店が潰れたかっていうのが、まあ、ほんとあの、恥ずかしいんですけど、車が便利ということで、私も実は使ってます。こないだうちの先代の十三回忌がありまして、ある友人が、話をしてくれました。うちの先代は実は自転車で徹底的に町を回った住職なんです。自転車っていうのは、おはようとかね、こんばんはと声かけながら歩ける、まあ歩くことではないけども、自転車の姿ってのは非常にお坊さんには相応しいと、その人は言う。でまあ、それに比べてバイクはいけないよね、ってな話をしてたんですけども、まあ、歩くという意味はですね、まあ勿論、そ

の実際に身体を使って歩くということと、町の人と、そこのおばさんとかおじさんと、せめておはよう、こんちは、という声が交わせる距離ってんでしょうか、先代は五十年住職をして、檀家を三倍から四倍増やした住職でありまして、その力ってのはやっぱりそういう所だったのかなあ、まあほんとの地域密着型をしたということが、まあ、その寺の一つの存在の基盤を作っていたのかなあということは、今更ながら実は、石川さんから言われて、たまたま奇しくも十三回忌の時に親父のその生き様を再認識させられたという、お祖師様の声かな、という感じもします。ただ問題はそれだけで対応できない、もっと大きな、いわゆるコミュニティといいますか、関係の持ち方をもう一歩考えていかないと、いわゆる、寺と地域の密着だけで済まない問題を、我々、せめて今日ここにいらっしゃる方々は、それだけで済まないよ、もっともっと大きな問題がそこにはあるのだと思うんです。私はインターネットの中でグーグルという、あの、会社の活動の展開、今までと全く違う逆転の発想から、例のマイクロソフトを凌ごうというまでの、でかきゃいいとは決して思いませんけども、いわゆる多くの人々の賛同を得たということを見た時に、やっぱりその従来の寺が地域に密着するというベースだけではない、それをもうちょっと展開をしていく、何かそういう、大きな要素ってものを、そろそろ、共通認識という意味で、浮き彫りにしておかないといけないのかなって感じはします。親父は自転車で地域密着したけども、じゃあ私は逆にブログを使って世界を相手にしてみようか、なんてな感じを、まあ思う所であるんですけど（笑）、その辺はどんなように。

石川氏　いや、広告の世界もですね、最近は売上げ的にみますと、まだテレビ媒体とか新聞媒体が売上げも量も多いわけですけども、広告市場が六兆円ある中で、例えばシェアで言えばテレビがだいたい半分ぐらい、その他のメディアに半分ということなんですけど、ネットの売上げが、全体の五％程度を占めるように伸長してきまして、雑誌媒体とか、ラジオ媒体の売上げ高を超えようとする数字になってきてます。六兆円のうちの五％ですね、三千億超程度、というのが現状です。ネットの売上げというのは、ネット、サイト、ブログなどを使用して広告をうった結果の

数字ですけどね。最近話題は、グーグルの話が出ましたけども、ＳＮＳといって、ソーシャル・ネットワーキング・サービスも注目されますね。急速にこのジャンルの広告への取り組みが伸びてきてます。よく田澤上人と話すんですけども、お坊さんが忙しくてなかなかコミュニケーションがとれないとか、逆に、檀家さんや一般の方達がお坊さんと話したい時にどういう手段で会話をしたらいいのか悩んでいる方もいるようですね。そういう時にネットメディアをお使いになったらいいんじゃないかと話をしてるんです。コストも安いですし、お寺から離れて生活している人がお寺の行事が分かったり、色々聞きたいことができたり、悩みを話してみたりということができるのであれば、今後は面白い、お互いの共通体験メディアになってくんじゃないかな、という風に思います。どうぞ。

司会　石川さんにお聞きしてみたい、世間の目という所で、お話をお聞きしたいんですが、石川さんから見た坊さん、社会が求める坊さんというか、日蓮宗に提言というんですか、あったら、あと十分くらいしかないですが。

石川氏　はい、我々広告の仕事でよく言うのは、お得意先企業の持つその企業らしさ、ってどこにあるんだろうという話がいつも出るんですね。田澤上人にも「日蓮宗らしさってのはどこにあるのか、何を指して日蓮宗らしいというのか」ということを伺いたい。このアンケートでも聞いてみたかったんですけど、お坊さんらしさはどんなところを見てお坊さんらしいと一般の人が見ているのかということに興味があるもんですから。また、最近日本人は、全体的に品格が落ちてきているように見えるし、社会ルールもマナーももう一つだなという人が増えて来ています。日蓮宗という宗派についても顔つきがもう一つはっきり見えないのではないか。この中央教研会議の対談の話を頂いてから、日蓮宗に関連したお寺さんのホームページを随分見させていただきましたが日蓮宗とは何かが明解に語られてるホームページが非常に少ないですね、お寺の紹介ばかりに終始してるものが多かったんです。提案としては、宗務院全体も、現宗研も、日蓮宗とは何か、っていうことについて、統一した考え方をホームページの中で紹介してくれという共通した考えを提示すべきじゃないかと、言わせていただきます。それは、私が作るとか作らないとかって問題

じゃなくて、そういう要素がないと日蓮宗がよく見えてこないと思います。お寺のいろいろな活動とか、お寺のいわれとかはあるんですけども、もう一つ「日蓮宗とは何か」ということに答えてないのではないか、という風に思ってるんです。その辺は如何でしょう。

田澤師　あの、特に教研会議の経験の中で申し上げますけども、非常に布教、或いは教化活動に熱心な人ってのは、一つには自分のできる範囲のもの、或いは自分の得手とするものを中心にしていく、してきたという自負が、また実績があると思うんですね。できない人は何か宗門から、教箋よこせという批判もあります。で、仰ったように、じゃあ、我々の中で、共通性をどこに置くか、これはあの、ある人もよく仰ってますけども、意外に歴史がないんですよね、日蓮宗の共通性を持とうという意識を持ったのは非常に近代であって、各自、それぞれが、お祖師様から繋がる所の法統とういう歴史はあるにしても、日蓮宗という枠の中で共通性を持って、それが対社会的にも、これが一つの色だって決めつけることには、時にはすごい抵抗があったりもしたと思いますし、特に戦時中等の経験も踏まえて、我々はそういう怖さってものを感じたものもあろうと思います。ただやっぱり今、石川さん言うように、外から見た時にバラバラじゃねえかと、日蓮宗といっても全部その、開いてみたらどうも何か言ってることも違うし、共通、せめて共通があったうえでそれぞれ、対応バージョンが違うっていうなら分かるんだけど、ということだと思うんです。例えば宗門運動で、ネーミングされました、いろんな運動の内容についての規定みたいなものは今後決まっていきます。ただそれだけでは済まない、現実的に共通の何か、社会的な、まあ、檀徒、或いはそうじゃない一般の方に対しても、日蓮宗ってのはこういうもんだ、っていうのを常に前面に出しておく、というような、道具といいますか、そういうものを、やっぱりこう、どっかで作っていかなきゃいけないのかな、という、必要を感じてきてるとは思うんです。ただまあ、一生懸命やってる人っていうのは、別にそんなもんなくたって、俺なりの歴史、或いはうちらの本山の歴史の中で十分これは対応していけるんだっていうものがまだ強いと思うんですが、それと今言った、

日蓮宗という一つの教団組織という部分との、ギャップをですね、我々はそろそろもう一回見直していく時だろうし、またこういう機会の中で是非、それについての提言などしていただきたいな、と思います。

司会　日蓮宗らしさ、っていうのは。

田澤師　日蓮宗らしさっていうのはね、やっぱりね、立正安国お題目、という風になっちゃうんです。ただ、もう一つ、活動として、私達もやはり是非これは、特に現宗研としての経験から、歴史から申し上げますと、日蓮宗の、特に、戦後の布教展開の、大きな活動の中に、戦後いち早く始めた、原水禁運動から始まった所の、立正平和運動です。宗祖の立正安国論にみえる、そうした布教の精神と申しましょうか、生き様と申しましょうか、それらを元にして現実の社会に対して訴えていこう、まあ、布教展開、活動の展開にしていこうと、社会に対する運動として位置付けあったってことは事実ですね。ただこれが今後どういう形に移っていくか、決め事で決められるもんじゃありません、やっぱり皆さんが共に認識し、また共に参加しなければ運動はなり得ないものであります。そういう意味で、運動本部そのものが規定上載ってるということだけの現実も、これ大きな問題がありますけども、少なくとも戦後、日蓮宗ではそうした、社会に対する大きなメッセージを発信する、世界にそうした原水禁運動の議長まで、日蓮宗の代表が務めたっていう、かなりそういうウエイトを占めていた時期もありますので、我々はそういうものをやっぱり無視できないし、それをどう今後、継承しながら展開していくかっていう意味では日蓮宗らしさってものは、他宗にないものとしては、言えるんではないかな、と思います。

石川氏　個々のお寺さんが、らしさを出すにはどうしたらいいんでしょう。

田澤師　そこが大きな課題になろうと思うんです、ですからさっき仰ったように、ある共通テーマ、共通項といいましょうか、或いは共通色と言いましょうか、それをみんなが共に出すのかどうかとか、ってその辺りは、まだまだ議論、賛否両論がまだまだ出てきてるんじゃないかなと思いますけどね。

司会　そこで日蓮宗と個別の教師の関わり方、この辺どうでしょうか。

田澤師　関わりですね。常にやっぱり言われてるように、これは我々自身が教団を支えてるわけだし、構成してるわけです。あの、日蓮宗って本体はどこにもないんで、規則的なだけで、その構成は我々皆さんが、作ってるだけですから、これをどういう風に形にするしかないと思うんですよ。

石川氏　全員がそういう意味でいくと、日蓮宗の広報マンである、ということですね。

田澤師　全員が広報マンですね。どっかの一部だけが広報マンじゃない。お寺なり、教会はその一つの地方の拠点になってくだろう、まあ、本山も含めてですけどね。そういう所の位置付けを、もう一度しておかないと、そのために今仰った共通性も必要だってことになるならば、我々はどっかでその、共通さを大事に使っていく部分も、当然出てくるだろうと思いますけどね。これ今までない、今までずーっと日蓮宗の歴史の中で、まあ日蓮教団といいましょうか、その門流から始まる歴史の中ではない課題であります。ただ今後、そういう部分の展開というものが、日蓮宗にとっては、必要だということになるかどうか、その辺のやっぱり議論を大いに十分しておかなきゃならない時期だと思ってます。非常に、業界から見れば遅れてると思いますけど。

石川氏　あの、総弘通運動もかなり、長かったんですけど、今度の立正安国・お題目結縁運動も、十八年の永きに亘って実行するということで、その運動を個々のお坊さんが支えていくには教育トレーニングとか、キャンペーンや運動を支えていく技術っていうんですか、そういうものが必要ですよね。どういう風にして主旨や目的を啓蒙し、浸透トレーニングしていくかが課題ですね。日蓮宗らしさはらしさとして、顔つきはどうあれ、運動の主旨を具体的に翻訳して、我々、また石川個人にどう伝えてくれるか、日蓮宗らしさを明確にしながら運動展開をしないと、間違っちゃうんじゃないかな、っていう感じがするんです。

田澤師　一個人がその、地域或いは与えられた現場の中でやっていく限界があると思うんです。これはあの、かつ

ては、住職は寺にいて、草むしって、或いはお檀家相手に喋ってれば良かった時代、もうそうはいかない。じゃあ、一から十まで、会計から専門知識までなければ、社会的な問題起きちゃう世の中です、じゃあ住職は、あれもこれも全部やんなきゃいけないのか、一人でオールマイティではあり得ないだろうと、それから、祈祷もするし声明はできなきゃ、まあ、お経はうまいし、しかもお説教はできる、しかも経理はうまい、もの書かせて、印刷はきれいだって、これ全部やったら恐らくまず不可能に近い、やっぱりそこで持ち分をどうしてくかという、今までにない、今までには要求されてこないものを、やっぱり我々集団の中で、持ち分をどうもっていくかっていう課題が一つ、それからやっぱり宗門ってものが、我々が支えてる教団が、それに対するバックアップがどこまでできるか。そのバックアップを、敢えて強制する部分もあるので、強制じゃないかという風にされる部分、まだまだそれは、歴史もなければこれから作り上げていく要素だと思うんですけども、よく言われます。課金だけ払って何にもくれないじゃないかという、ほんとによく声を聞きます、やっぱりそれに対するバックアップがない、やれというだけで何も後押しがないじゃないかという意味では、教箋というような形でのバックアップじゃなくて、宗門というものが大きく社会に対して、大丈夫だよ、うちらはすごい教団なんだよ、という何というかな、姿勢を示しているバックアップ、こういう部分がもう一歩必要だろうかなという、それを作り上げていかなきゃなんないのかなという。

司会　時間が迫ってきました。最後に、石川さんに締めくくりの言葉を頂戴して終わりたいと思います。

石川氏　はい。田澤上人に一般人の、素人として、いろいろなことを聞きましたけども、社会が多様化してる中で共生してく、日蓮宗らしさとは何かとか、京都の南禅寺の暖簾じゃないですけど、日蓮宗というブランドをどう扱うのか。皆さんお坊さんで、何のお坊さんですか、って問われたら何のためらいもなく、自信を持って日蓮宗のお坊さんです、ということを言えるためにもブランドコンセプトをきちっと整理統一しておく必要があるんじゃないかと思います。今後は日蓮宗のブランド行動基準を、教団のトップのほうが提示していかないと、それぞれの日蓮宗、しっ

ぽを見て日蓮宗、頭を見て日蓮宗と部分、部分を見て、日蓮宗という理解をされても非常に困るだろうと思います。社会との接点にいる現場のお坊さん一人ひとりにとっては、大変な役割を負っています。それだけの力量はあるのかどうか。やっぱり、教団の支援がないとやっていけないのか。どこまで教団がきちっと支援してあげられるか、個人のお寺のやることはどこまでか、ということをしっかり定義されれば、活動に対する評価が高まるのではないでしょうか。我々、一般の人間としては日蓮宗のお坊さんは存在価値のある、満足度の高いお坊さんであって欲しいと思うし、先ほど山本一力先生が仰ったように、最初に出会ったお坊さんがとても素敵だったんで、生涯にわたって何かに付けてお坊さんに相談をするという行動がとれたんだと思います。ですから、出会いが良かったというだけでは済まされない問題が、この宗教と我々一般生活人との間にあるような気がします。是非皆さんもう一度、今回の分科会でまた取り上げてもらって、真剣な議論をしていただければという風に思います。ありがとうございました。

司会　ちょうど時間となりました。（拍手）中央教研のメインであります三分科会でご討議、お願い致します。ご苦労さまでした。